

学生による「パソコン先生」ボランティア —情報教育支援活動へ参加した大学生の意識調査—

今野紀子[†] 土肥紳一[†]

地域の情報リテラシーの向上・情報教育の充実を図ることを目的とした、大学生による情報教育支援ボランティア派遣事業が進められている。学生は地域の教育機関に派遣され「パソコン先生」ボランティアとしてPCを利用した教育補助、情報処理操作補助や助言業務を担っている。今回、本事業に参加した大学生を対象に学生ボランティアの視点から活動への意識や期待についての調査を実施した。その結果、学生は本事業に対して高い有意義感を持っており、この活動の経験を通して人間的に成長すること<人生勉強>に意義を見出していること、反面、自分のITに関する専門知識・技術力が十分に発揮できていない不安全感が強いことがわかった。今後、派遣先とのマッチングや事前研修の徹底など、彼らが持っている専門知識・技術力を十分に発揮できるような環境づくりを図ることで、さらなる有意義感の向上が期待できることが示唆された。

Information Education Support to a Community by University Student's Volunteers - the attitude survey of university student's volunteers -

NORIKO KONNO[†] SHINICHI DOHI[†]

The information education support project to a community by university student's volunteers is promoted. This project has aimed to improve local populace's information literacy. In this study, the attitude survey of university student's volunteers work was done. The data show that the students possess the meaning of the activity to < study of life >. And, the students strongly have the feeling of insufficiency that "Expertise and knowledge concerning IT" was not able to be demonstrated enough. In the future, the creating environment that can demonstrate student's power enough is necessary.

1. はじめに

筆者らが所属する大学とキャンパス所在地である千葉県印西市との間で2005年から情報教育支援ボランティア派遣事業が進められている[1]。これは地域の情報リテラシーの向上、情報教育の充実を図ることを目的とした地域連携事業である[2]。本学部の情報環境学を専攻する学生が「パソコン先生」として、地域の教育機関に Outreach、PCを利用した教育補助、情報処理操作補助や助言業務等の情報教育支援をおこなうものである。この事業の背景には、高度情報化社会に見合った情報活用能力の育成が学校教育において特に求められているが、専門知識や技術を持ち情報教育を指導・支援できる人材がまだまだ十分でない状況がある[3]。知による地域支援は大学の責務であり、期待される領域でもある。本事業の充実を図るため、2007年に派遣先の教育現場が求める効果的な情報教育推進支援のあり方や更なる地域連携のあり方についての意識調査を実施した[4]。この調査結果から、教育現場では情報教育の必要性を実感しているが知識・技術を兼ね備えた

指導者が不足している状況があり、学生ボランティアをTI(Team Teaching)などで積極的に教育場に活用したいという意識が強いこと、そのため、教員と一緒に授業づくりができる技量を持つ人材を求めていることがわかった。「期待される情報教育支援ボランティア像」には即戦力として使える知識・技術を持ち、外見も適切な教員としての存在が求められていた。そこで問題になるのが実際に派遣されるボランティア学生の実態である。文部科学省は大学教育の中にボランティア活動を積極的に取り入れることを奨励している[5]が、ボランティア活動が大学教育に組み込まれるに従ってボランティア学生と派遣先とのマッチング問題や相互の情報不足が危惧される。本稿ではボランティア学生を対象とした意識調査を実施し、その結果を分析することで活動する側の意識や期待を明らかにし、派遣する側、される側の意識の相違点を踏まえながら効果的な地域連携のあり方について検討する。

2. 情報教育支援ボランティア派遣事業

以下に情報教育支援ボランティア派遣事業の概略を述べる。

(1) 目的

地域の小中学校など教育機関に大学生の情報教育支

[†] 東京電機大学情報環境学部

School of Information Environment Tokyo Denki University

援ボランティアを派遣し、コンピュータ利用学習や情報処理操作技術、知識など情報教育の充実に図る。

(2) 派遣時間

派遣期間は、1学生につき1期30時間(1日3時間程度の活動)である。

(3) オリエンテーション

参加学生に対して、印西市教育センターの派遣事業担当者、大学側教職員が行う事前指導である。内容は以下の通りで、1時間程度実施する。

①印西市教育センター派遣事業担当者からの説明

参加にあたっての心構え、守秘義務、具体的業務と学校側からの期待と状況の説明を行う。

②大学側の担当教員による指導

義務教育の現状、児童生徒への接し方、情報教育のあり方の指導を行う。

③大学側事務部からの注意事項

ボランティア参加にあたっての注意、卒業科目「ボランティア活動」の履修手続きおよび単位認定について、保険加入手続き、誓約書の提出説明を行う。

(4) 大学での履修取り扱い

派遣事業は、参加学生の申請により「ボランティア活動」として卒業科目(選択2単位)で単位認定される。

(5) 参加状況

印西市全体で19校(小学校13校、中学校6校)あるが、2005年度は小中学校9校で派遣要請があり、参加学生が12名であった。2006年度には6校増加の15校から派遣要請があり、32名の学生が参加した。2007年度は15校から派遣要請があり、16名の学生が参加した。

3. 研究方法

本事業に参加した大学生を対象とし、情報教育支援ボランティア活動に対する意識や期待についての調査を実施する。

(1) 方法: 質問紙調査(無記名アンケート方式)と面接調査(半構造的インタビュー方式)を実施する。質問紙調査は大学側担当者が配付・回収する。面接調査は自由な対話を重視しつつ特定テーマについて話し合う「半構造的インタビュー」方式で1時間程度実施する。

(2) 対象: 2006、2007年度情報教育支援ボランティア派遣事業に参加した学生で、卒業した学生を除く20名を対象とする。

(3) 時期: 2008年4月上旬～下旬に実施する。

(4) 調査内容: 質問紙調査項目を表1に示す。4を除く1～20項目については「1:まったくそうでない」

～「5:非常にそうである」の5段階リッカート尺度で評価する。4は選択式。21、22項目についてはそれぞれ自由記述で回答する構成となっている。

表1 情報教育支援ボランティア派遣事業に係るアンケート調査

Table 1 Questionnaire survey items	
評価項目について5段階リッカート尺度で評価する。 *「1:まったくそうでない」「2:あまりそうでない」 「3:どちらともいえない」「4:ややそうである」 「5:非常にそうである」	
項目	評価内容
1. 情報教育の必要度	小・中学校において情報教育はどの程度、必要であると思いますか。
2. 情報教育支援活動の有意義度	この活動は、あなたにとってどの程度有意義なものでしたか。
3. 先方への役立ち認識度	あなたの活動は、どの程度、派遣先学校に対して役に立ったと思いますか。
4. 得意とする活動内容の順位	あなたが得意とする活動内容の順位(1～9)を記入してください。(選択式)
5. 専門知識・技術力の重要度	この活動において「ITに関する高度な専門知識・技術力」はどの程度、重要であると思いますか。
6. 専門知識・技術力の達成度	あなたの「ITに関する専門知識・技術力」はどの程度、発揮できましたか。
7. コミュニケーション力の重要度	この活動において「児童生徒への話しかけ等のコミュニケーション」はどの程度、重要であると思いますか。
8. コミュニケーション力の達成度	あなたの「児童生徒への話しかけ等のコミュニケーション」はどの程度、発揮できましたか。
9. 指導力の重要度	この活動において「児童生徒への指導力」はどの程度、重要であると思いますか。
10. 指導力の達成度	あなたの「児童生徒への指導力」はどの程度、発揮できましたか。
11. 提案・創意工夫力の重要度	この活動において「IT活用への助言や創意工夫」はどの程度、重要であると思いますか。
12. 提案・創意工夫力の達成度	あなたの「IT活用への助言や創意工夫」はどの程度、発揮できましたか。
13. マナーの重要度	この活動において「言葉遣いや日常の挨拶といったマナー」はどの程度、重要であると思いますか。

14. マナーの達成度	あなたの「言葉遣いや日常の挨拶といったマナー」はどの程度、発揮できましたか。
15. 外見の適切さの重要度	この活動において「服装や髪型といった外見の適切さ」はどの程度、重要だと思いますか。
16. 外見の適切さの達成度	あなたの「服装や髪型といった外見の適切さ」はどの程度、発揮できましたか。
17. 主たる授業参画の対応	「一斉授業を担当してほしい」と依頼されたらどの程度、対応は可能ですか。
18. TT (Team Teaching) 授業参画の対応	「TT 等で児童生徒の個別指導を担当してほしい」と依頼されたらどの程度、対応は可能ですか。
19. おすすめ度	後輩などに、この活動をすすめてみたいと思いますか。
20. 再活動の希望度	また、機会があれば、この活動をやりたいと思いますか。
21. 改善すべき問題 <自由記述式>	この活動の問題点あるいは要望がありましたらお書きください。
22. 大学担当者への要望 <自由記述式>	大学担当者へのご意見・要望がありましたらお書きください。

4. 結果

4.1 質問紙調査結果

2006、2007 年度情報教育支援ボランティア派遣事業に参加した学生で、卒業した学生を除く 20 名を対象に質問紙を配布し、15 件の有効回答が得られた (回答率 75%)。その内訳は 2006 年度 4 件、2007 年度 11 件であった。本ボランティア活動に参加する学生の多くは 3、4 年次生で履修するため、2006 年度参加の学生には、すでに卒業した学生が多く含まれており、回答数は低くなった。また有効回答の中には中学校を派遣先とした回答がなく、全て小学校 (2 年生～5 年生担当) であった。以下に結果を述べる。なお、説明文中の β は標準化偏回帰係数、 R^2 は決定係数 (寄与率)、 r はピアソン積率相関係数を示す。

(1) 情報教育の必要度

「小・中学校において情報教育はどの程度、必要であると思うか」の結果を図 1 に示す。1 は 0.0%、2 は 6.7%、3 が 40.0%、4 が 13.3%、5 が 40.0% であった。平均は 3.9 である。情報教育の必要度には知識技術の重要度 (図 5 参照) との相関関係 ($r=0.65$) があった。

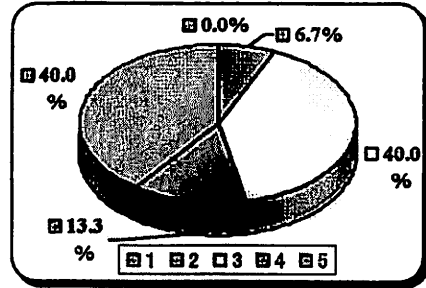


図 1 情報教育の必要性

Figure 1 Necessity of Information Education

(2) 情報教育支援活動の有意義度

「この活動は、あなたにとってどの程度、有意義なものであったか」の結果を図 2 に示す。1、2、3 は 0.0% であり、4 が 20.0%、5 が 80.0% であった。平均値は 4.8 である。学生は本事業に対して、大変有意義な活動であったという実感を持っていることがわかる。面接調査結果から「人に教えるという難しさを知ることができた」「自らが学んだことを人に教える機会が今までになかったので、よい経験になった」「小学生と触れ合うことで知識の幅が広がった」「様々なコミュニケーションを通して成長できた」ことが挙げられた。

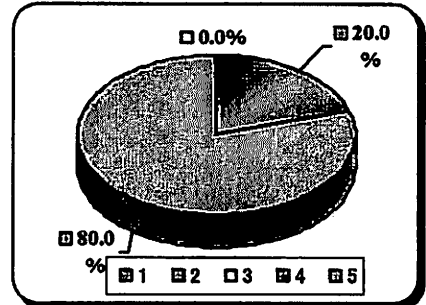


図 2 情報教育支援活動の有意義度

Figure 2 Significant Degree

(3) 先方への役立ち認識度

「あなたの活動は、どの程度、派遣先学校に対して役に立ったと思うか」の結果を図 3 に示す。1 と 2 は 0.0%、3 が 13.3%、4 が 66.7%、5 が 20.0% であった。平均値は 4.1 である。面接調査結果から「先生方や子ども達に喜んでもらえたので嬉しくもあり、やりがいを感じた」「言われたことをこなすことしかできなかったが、その分与えられた課題は高いレベルでこなせたと思う」「授業以外でも教材づくりやデータ入力も手伝うことができた」が挙げられた。

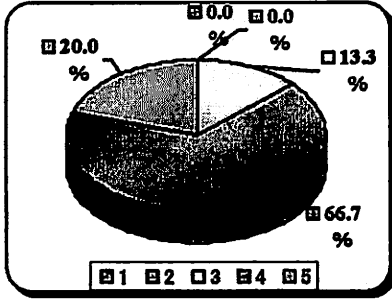


図3 先方への役立ち認識度

Figure 3 Useful Recognition Level to Other Party

(4) 得意とする活動内容の順位

「得意とする活動内容の順位(選択式)」について上位3位の結果を図4に示す。横軸が希望順位、縦軸が希望割合である。上位3位の結果では、「ふれあい」「個別指導」の割合が極めて高いことがわかった。一方、派遣先教員に行ったアンケート調査結果では、学生ボランティアに依頼したい内容の上位は「授業補助」「PCなど情報機器の準備・整備」であった。

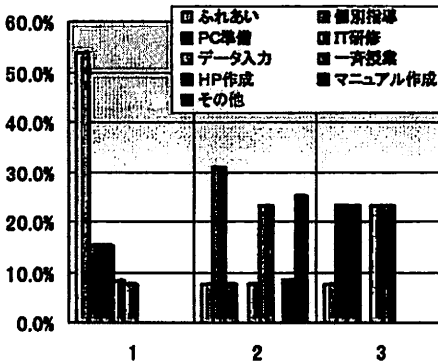


図4 得意とする仕事内容の順位

Figure 4 Order of Skillful Content of Work

(5) 専門知識・技術力の重要度と達成度

「この活動において『ITに関する高度な専門知識・技術力』はどの程度、重要であると思うか」という重要度と、「あなたの『ITに関する専門知識・技術力』はどの程度、発揮できたか。」の達成度についての結果を図5に示す。重要度平均値は2.9、達成度平均値は3.8であった。学生はこの活動においてITに関する高度な部分での専門知識・技術力は、あまり重要と感じていないことがわかる。

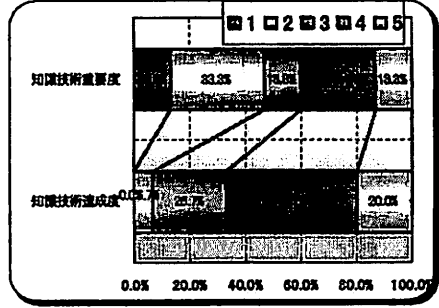


図5 専門知識・技術力の重要度と達成度

Figure 5 Importance Degree and Achievement Level of Expertise and Technology

(6) コミュニケーション力の重要度と達成度

「この活動において『児童生徒への話しかけ等のコミュニケーション』は重要であると思うか」という重要度と、「あなたの『児童生徒への話しかけ等のコミュニケーション』はどの程度、発揮できたか」という達成度についての結果を図6に示す。

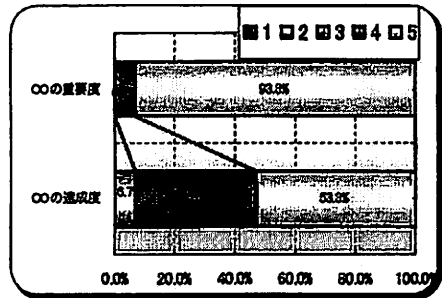


図6 コミュニケーションの重要度と達成度

Figure 6 Importance Degree and Achievement Level of Communications

重要度平均値は4.9、達成度平均値は4.4であった。この活動においてコミュニケーション能力は非常に重要であるという認識を持っていることがわかる。コミュニケーションの達成度は提案創意工夫の達成度($r=0.53$)との相関があった。

(7) 指導力の重要度と達成度

「この活動において『児童生徒への指導力』はどの程度、重要であると思うか」という重要度と、「あなたの『児童生徒への指導力』はどの程度、発揮できたか」という達成度についての結果を図7に示す。重要度平均値は4.6、達成度平均値は3.5であった。指導力の到達度は、マナーの達成度($r=0.88$)、外見の適切さの達成度($r=0.65$)、提案創意工夫の達成度

($r=0.53$) との相関が見られた。「指導力」に対する認識には、指導者としての振舞いとしてのマナー、外見といった「教員らしさ」や自発性が発揮できたかどうか、カギとなっていることがわかる。

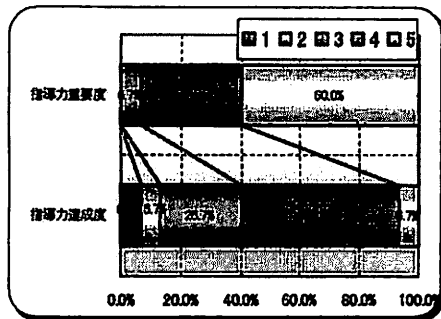


図7 指導力の重要度と達成度

Figure 7 Importance Degree and Achievement Level of Leadership

(8) 提案・創意工夫力の重要度と達成度

「この活動において『IT活用への助言や創意工夫』はどの程度、重要であると思うか」といった重要度と、「あなた『IT活用への助言や創意工夫』はどの程度、発揮できたか」といった達成度についての結果を図8に示す。

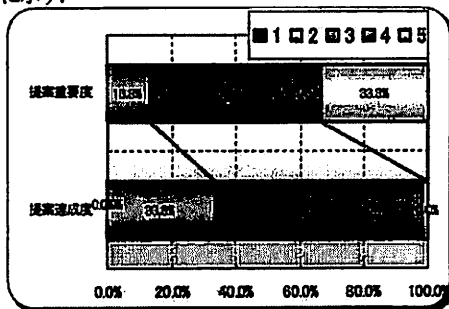


図8 提案・創意工夫力の重要度と達成度

Figure 8 Importance Degree and Achievement Level of Proposal and Inventiveness Power

重要度平均値は4.2、達成度平均値は3.7であった。提案・創意工夫力の達成度は、コミュニケーションの達成度 ($r=0.53$)、指導力の達成度 ($r=0.53$) との相関が見られた。

(9) マナーの重要度と達成度

「この活動において『言葉遣いや日常の挨拶といったマナー』はどの程度、重要であると思うか」といった重要度と、「あなた『言葉遣いや日常の挨拶といったマナー』はどの程度、発揮できたか」といった達成

度についての結果を図9に示す。重要度平均値は4.8、達成度平均値は4.0であった。マナーの重要度は高く、18年度よりも19年度参加生の方が重要度の認識が高かった。マナーの達成度と指導力の達成度 ($r=0.88$)、創意工夫の達成度 ($r=0.55$) には相関関係がみられた。

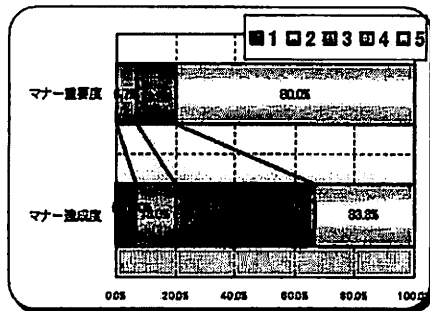


図9 マナーの重要度と達成度

Figure 9 Importance Degree and Achievement Level of Manners

(10) 外見の適切さの重要度と達成度

「この活動において『服装や髪型といった外見の適切さ』はどの程度、重要であると思うか」といった重要度と、「あなた『服装や髪型といった外見の適切さ』はどの程度、発揮できたか」といった達成度についての結果を図10に示す。

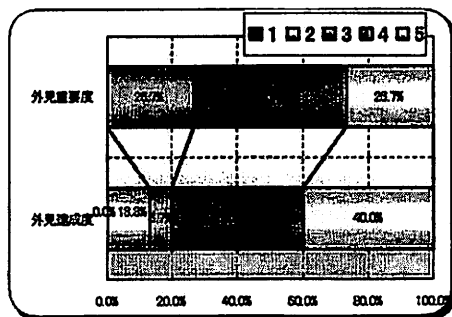


図10 外見の適切さの重要度と達成度

Figure 10 Importance Degree and Achievement Level of Appropriateness of Face

重要度平均値は4.0、達成度平均値は4.1であった。外見の適切さの達成度は、指導力の達成度 ($r=0.65$)、マナーの達成度 ($r=0.77$) との相関関係がみられた。

(11) 主たる授業参画の対応

『一斉授業を担当してほしい』と依頼されたらどの程度、対応は可能かという質問の結果を図11に示す。1と2は0.0%であり、3と4が26.7%、5が46.7%で

あった。平均値は4.2である。対応可能とする学生の多くが教育実習を目前に控えた教職課程履修学生であった。主たる授業参画の意識は再活動の希望度 ($r=0.54$), TT 授業参画の対応 ($r=0.54$) との相関関係がみられた。

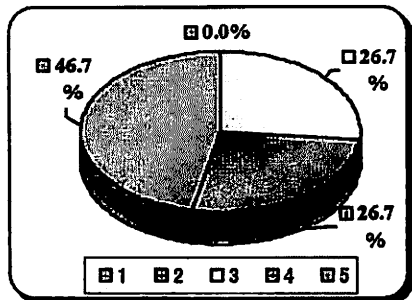


図 11 主たる授業参画の対応

Figure 11 Correspondence Level to Class Guidance

(12) TT 授業参画の対応

『TT 等で児童生徒の個別指導を担当してほしい』と依頼されたらどの程度、対応は可能か』という質問の結果を図 12 に示す。

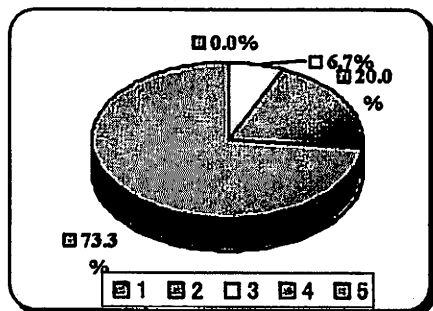


図 12 TT 授業参画の対応

Figure 12 Correspondence Level to Class Guidance by TT

1 と 2 は 0.0% であり, 3 が 6.7%, 4 が 20.0%, 5 が 73.3% であった。平均値は 4.7 である。主たる授業参画の対応に比べて, 対応可能と回答している割合が高くなっており, 教職課程履修学生以外も対応可能であると回答していた。

(13) おすすめ度

「先輩などに, この活動をすすめてみたいと思うか」という質問の結果を図 13 に示す。1 は 6.7%, 2 は 0.0% であり, 3 が 6.7%, 4 が 33.3%, 5 が 53.3% であった。平均値は 4.3 である。面接調査結果からは「人生勉強になる」「教職履修している学生には是非すすめてい」「単位も経験も得られる」「現場の大変さ, 楽しさ, やりがいは体験しないとわからないから」「この活動を通

して視野を広げて欲しい」「コミュニケーションを高める場として有効であるから」「自分を大きく成長させるチャンスであると思う」といった意見が挙げられた。一方で「合う, 合わないがはっきりしており, 合わない学生にはすすめられない」との意見もあった。

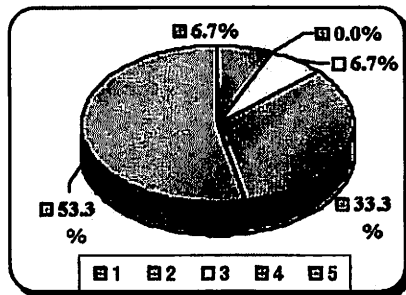


図 13 おすすめ度

Figure 13 Degree Encouraged to Others

(14) 再活動の希望度

「また, 機会があれば, この活動をやってみたいと思うか」という質問の結果を図 14 に示す。1 は 0.0%, 2 は 13.3% であり, 3 が 6.7%, 4 が 20.0%, 5 が 60.0% であった。平均値は 4.3 である。面接調査結果から「ためになり楽しかったから」「教えることの楽しさに気づかされた」「次回はもっとうまく教えたい」「自分の成長を実感したから」といった意見が挙げられた。一方で「活動時間を確保しにくい」「余裕がない」との意見もあった。

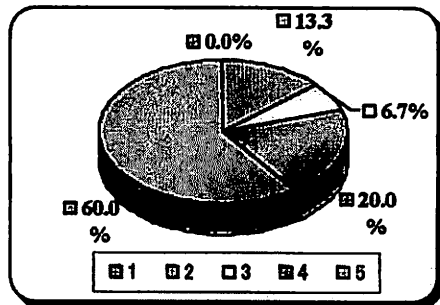


図 14 再活動の希望度

Figure 14 Degree by which Activity is Hoped Again

(15) 改善すべき問題

「情報教育支援ボランティアの問題点, 要望は何か」という質問の自由記述意見を以下に記す。学生の質・活動, 派遣事業の体制に関わる事柄が指摘された。

① 学生の質・活動について

・単位目的で知識のない学生が派遣されないように大学側で審査を設けるべきだと思う。

- ・長期にわたって活動できるようにしたい。
- ②派遣事業の体制
 - ・あくまでも「補助」であることの徹底をして欲しい。
 - ・学生ボランティアに求められる仕事内容を明確にしたい。

(16) 大学担当者への要望

「大学担当者への意見・要望は何か」という質問の自由記述意見を以下に記す。

- ・できるなら必要経費として交通費と食費（給食）を支給してもらえると有難い。
- ・このような活動をする機会を増やした方が学生のためになると思う。

4.2 面接調査結果

無作為抽出した参加学生 8 名を集めて面接調査を行った。教育現場での戸惑いを感じつつもボランティアを通して人の役立つこと、体験を楽しむことへの充実感と喜びが窺われた。現場で自分の活動が役立った喜びを語る一方、授業への主体的な参加を突然求められ、戸惑った体験を語っていた。また、多忙な教育現場の中で自己がどのように行動すべきか判断に迷うケースが多かったことが語られた。

5. 考察

5.1 学生の情報教育支援ボランティア活動の意義

本事業に参加した大学生を対象とし、ボランティア学生の視点から情報教育支援ボランティア活動に対する意義や期待、地域連携のあり方についての調査を実施した。先の 2007 年に派遣先教員を対象にした調査結果(4)からは、教育現場が期待しているのは「対人的能力・性質」の高い人材であり、情報教育支援ボランティアには、即戦力として使える知識・技術を持ち、外見も適切なく教員としての存在>が求められていることが窺えた。しかしながら、今回の情報教育支援ボランティア学生への調査結果からは、一部の教職課程履修学生を除き一斉授業を派遣先教員から期待されて困惑する学生も多かったこと、学生が望む仕事内容は「ふれあい」「個別指導」であり(図 4 参照)、ボランティア活動の経験を通して人間的に成長すること<人生勉強>に意味を見出していることがわかった(図 13, 14 参照)。同時に学生は情報教育支援ボランティア活動を非常に有意義な活動であると認識していることがわかった(図 2 参照)。今後の効果的な活動のあり方を検討するため、学生の有意義感を高める要因を明確にすべく CS (Customer Satisfaction) 分析をおこなった。CS 分析とは、目的変数と説明変数との単相関係数を重要度、説明変数の評価値を満足度として分析する手法である。本論では用語が重複しているため重要度を関

与度、満足度を充足度と表記する。目的変数を「情報教育支援活動の有意義度」、説明変数を「役立ち度認知度」「知識技術の達成度」「コミュニケーションの達成度」「指導力の達成度」「マナーの達成度」「外見の適切さの達成度」とし CS 分析をおこなった。

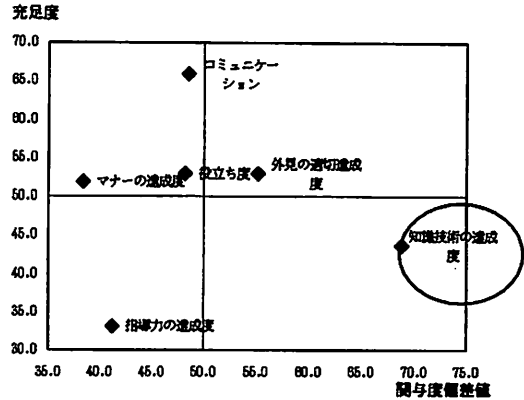


図 15 CS 分析プロット
Figure 15 CS Analysis Plot

図 15 はそれぞれを偏差値化し、プロットしたものである。縦軸が充足度偏差値、横軸が関与度偏差値となっている。分析の結果、マナーの達成度(関与度偏差値: 38.3)、指導力の達成度(関与度偏差値: 41.2)は有意義度に対する関与度が低いことがわかった。一方、IT に関する情報教育必要度の関与度偏差値は 68.8 と高く、情報教育支援ボランティア活動の有意義度に大きく関与していた。しかしながら情報教育必要度の充足度偏差値は 43.6 と低くなっており、参加学生の中に自己の IT に関する専門知識・技術力が十分に発揮できていない不安全感が強いことが読み取れた。面接調査でも「初めての活動で要領がつかめず戸惑ったが、次は自分の持っている力をもっと発揮したい」との意見が多かった。今後、派遣先とのマッチングや事前研修の徹底など、彼らが持っている専門知識・技術力を十分に発揮できるような環境づくりを図ることで、学生の情報教育支援ボランティア活動に対する意義ややりがいが高められることが示唆された。

5.2 派遣事業への意識構造分析

本事業に参加した学生が、再度、活動を希望するかといった再活動の希望度についての意識構造分析をおこなった。その結果を図 16 に示す。再活動の希望度には IT 授業参面の対応 ($\beta=0.87$) が関与していた ($R^2=0.82$)。IT 授業参面の対応と主たる授業参面の対応 ($r=0.54$)、マナーの重要度 ($r=0.69$) にはそれぞれ相関関係があり、マナーの重要度には外見の適切さの達

成度 ($r=0.52$) が、外見の適切さの達成度にはマナーの達成度 ($r=0.77$) が相関関係にあった。リピータとして活動を希望する学生は、IT として児童生徒の指導を担当することができ、態度や行動も模範的な存在としての意識が高いことが窺える。この結果は、派遣先教員が情報教育支援ボランティアに求める人間像と一致していた。

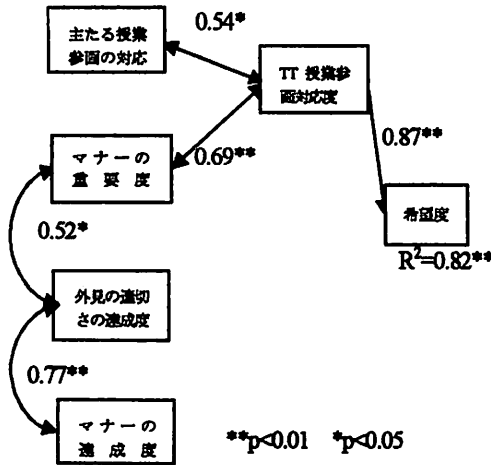


図 16 再活動への希望度に対する意識構造
Figure 16 Consideration Structure of Degree by which Activity is Hoped Again

派遣先教員を対象とした意識構造分析の結果を図 17 に示す。派遣先教員の現状の満足度には、情報教育支援ボランティアに対する「専門知識・技術力の満足度 ($\beta=0.48$)」「指導力の満足度 ($\beta=0.28$)」「外見の適切さの満足度 ($\beta=0.23$)」がそれぞれ関与し、派遣事業の有用度については、「専門知識・技術力の満足度 ($\beta=0.36$)」「授業参画の意識度 ($\beta=0.24$)」の各要因が関与していた。派遣の「希望度」には「有用度 ($\beta=0.56$)」が関与していた。派遣先では、情報教育支援ボランティアに対し、教員と一緒に授業づくりができる技量を持つ人材=教員>を求めていることが窺え、ボランティア学生の専門知識・技術力、指導力、外見の適切さが期待されていた。学生は実際の活動を通して「求められる人物像」を機敏に察知しており、再活動を希望するリピータには派遣先が求める適性の高さが看取された。しかしながら現状は、3,4 年次の学生が大半で、時間的にリピータとして活動できる学生はほとんどいない。派遣する側、される側のマッチングを高めるためには、リピータを増やす工夫がカギとなる。

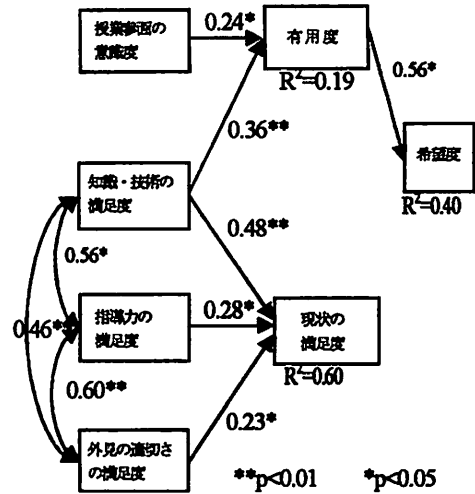


図 17 派遣先教育現場の意識構造
Figure 17 Consideration Structure of Educational Site at Dispatch Destination

6. 今後の課題

本事業が開始された 2005 年度は、大学側も初の試みであったため事務手続が中心のオリエンテーションを実施したが、2006 年度以降は、事前研修の側面をより重視し、実際に使用される機材やソフトの操作実習を学生に課している。ボランティア派遣側である大学では、学生の有意義感を向上させるため、彼らの専門知識・技術力を十分に発揮できるような環境づくりを図ることが必要である。また早い学年から本事業のボランティア活動を体験させ、リピータとして活動を継続させる工夫を講じることも課題である。

参考文献

- 1) 印西市：印西市情報化計画(2002～2006 年度)
- 2) 今野紀子，土肥紳一：学生ボランティアによる情報教育支援ボランティア派遣事業—地域連携と情報教育推進—，情報処理学会，情報教育シンポジウム SSS2006，Vol.2006，no.8，p301-p306.
- 3) 情報処理学会情報処理教育委員会：日本の情報教育・情報処理教育に関する提言 (2005)。
- 4) 今野紀子，土肥紳一：学生ボランティアによる地域への情報教育推進支援—求められる支援のあり方とは—，情報処理学会，情報教育シンポジウム SSS2007，Vol.2007，no.6，p135-p142.
- 5) 文部科学省生涯学習政策局社会教育課：第 4 回全国奉仕活動・体験活動推進協議会，地域教育再生プラン—地域ボランティア活動推進事業 (2004)。